

喜劇 十六形

(三場)

曾我廼家五郎

場所

- 一、木管會社横手の場
- 二、本田秀吉宅の場
- 三、積川事務室の場

人物

本田秀吉	工夫
山本金太郎	同
爲吉	本田の父
菊子	積川の夫人
田川辰三	工夫
積川清	社長
河村十助	工夫
田中四良吉	同

おとみ	おたか	鈴木さと	吉井萬作	山本長吉	吉田とら	榎本菊松	池端らく	順田佐吉	河内留吉	おみね	小野はる	木下松藏	おみつ	山形正吉	八木仲吉	土屋梅吉
女工	秀吉妹	女工	同	工夫	女工	工夫	女工	同	工夫	義太夫	女工	工夫	女中	支配人	同	同

一、木管會社横手の場

本舞臺、通りの煉瓦造り、上手斜に奥へ通ずる心、所々に立木あり、總て會社内、横手、午後六時前後の舞臺、光線稍々暗し淋しき詠への囃子にて幕開く。

幕の内より工夫萬作、長吉、菊松、佐吉、留吉、松藏、仲吉、四良吉、十助、梅吉、辰三は、何れも紙袋に四五十錢を入れたる『日給袋』を持ち口々に小聲にて社長に對する不平を並べ居る體、舞臺一面不穩の情態漂ひ殺氣を帶ぶ、綃々有つて工夫辰三はツツト上手に立ち上りて。

辰三 エ、面倒臭えから、遣て仕舞へ、爰許りが木管會社ぢやねえ、餘り弱い者虐めを、仕やるぢやねえか、此の會社叩き壞してしまへ、俺れ一人で引受けて、喰ひ込んでやるから。

十助 待ちねえ……。遣ちまふのは、何時でもやれる、三人寄りや文珠の智慧だ、亂暴な眞似しちや、後が面倒だぜ。

四良吉 ヒヤく。

辰三 誰だえ、ヒヤくなんて、吐しやがつたのは。

松藏 オイく辰三、マアく宜いわえ、お前丈けやがな、會社を打潰すなんてえのは、マアく待ちいなア。

辰三 だから、上方の奴は嫌れえだい、江戸ッ兒は氣が短けえや、話が判らなきや遣ちまふの
だい。

松藏 上方者かて、東京の者かて、詰り物の道理は同じやがな、東京も大阪も冬は寒むいし夏
は暑いよつてなア。

辰三 何に、云やがるんだえ贅六め。

梅吉 マアく待てく、内輪喧嘩しても、始まらぬわえ、俺れは東海道の濱松生れで、東京も
大阪も鼻屑はせぬが、會社を、叩き壊すなんて、亂暴ぢや、職長の本田も心配して呉れて
居るし、山田の金太も今話に行て呉れてるんぢやないかまあ其の返事を聞いてからの事
にせい。

仲吉 爾うぢやく喧嘩をするより、穩かに、話をつけて、手間賃を貰ふ方が、賢やぜ。

辰三 俺れを、阿呆ぢやと吐すのかい。

四良吉 お前を阿呆ぢやとは云やせんがな、お前職場で、一番賢しこい男ぢやがな、ア、賢しこ
いく、怒るなや。

辰三 變な、口の利き方をするなえ、ヨシ其れぢや、俺れは、支配人に逢うて、話をつけて來て
やるから、皆んな待つてろい。

十助 待ちねえく、山田の金太が、行つて、居るぢやねえか。

辰三 籠棒め、ぼんやりの金太が、行つて、話がつく筈がねえや。

萬作 此奴は、全くだ、辰兄に、行つて貰はうよ。

梅吉 其りや不可ねえ、金太の奴は、駄目でも、職長の本田が、行つて居りや、宜いぢやねえか。

佐吉 本田は、行つて居ねえやうだぞ、先き、職場の隅で、青い顔して、腕組して何んか、考へて居たよ。

四良吉 矢張り之れで、心配して居るのぢや。

松藏 今、職場には、見えなんだぞ。

十助 歸つて、仕舞つたのぢや有るめえか。

辰三 此の話が、煩せえから、逃げて仕舞つたのぢやねえか。

仲吉 眞逆、其麼男やおまへんやらう。

辰三 あの、口の利き方が厭やなんだ、此の場合おまへんやらうなんて生温い、口を利くなえ。

(ト此の話中に上手より女工おとら、おとみ、おさと工女の拵へにて各自手に辨當包提げていで来る十助は之れを見て。)

十助 オイ、モウ仕舞つたのかえ。

おとみ 五時で上がりぢや。

四良吉 大きな尻ぢやなア。

おさと ほといて。

(ト云ひ捨て、下手へはいる同時に上手より同じ工女の拵へにて辨當包を提げておはる、おらくの兩人いで来る。)

おらく 何方も左様なら。

辰三 オイ、本田の妹は、未だ工場に居るかい。

おはる 本田の妹とは、誰れやいな。

おらく おたかはんの、事やろな。

十助 爾うだ俺れん處の、職長の、妹よ。

おはる 今日是用が出来たと云うて、十二時限りで仕事を休んで歸へつて仕まうた。

松藏 何んの用でや。

おはる 其麼事知らんで。

松藏 何んで、聞いとかんのぢや。

おはる フウン偉い、濟まんな。

松藏 何にをッ。

おらく おはるはん、相手に仕ないな、これ阿呆やがな。

(ト言ひ捨て、下手へ兩人はいる。)

松藏 何んかしてけつかるのぢやえ、オイ職長の妹は歸つたと、云ふとるぜ。

梅吉 夫れぢや、本田も歸つたのぢやなからうか。

辰三 俺れ支配人の部屋へ、行つて来てやらうよ。

(ト立ち上る時上手より。)

金太 其麼無茶な話がおますかいなく、来ておくなはれ来ておくなはれ。

山形 何處へ引張つて行くのだ。

(ト言ひながら上手内より金太郎は支配人山形の手を取り好みの職工の拵にて山形は背廣服四十格好の拵へにていで来る。職工一同は此の聲に皆々上手を向く。)

一同 オイく、金太、怎うしたく。

(ト皆々口八釜敷兩人を取り捲く。)

金太 怎うも恁うも有るかいなア、餘んまり、判らんよつて、皆に聞いて貰ふと思つて、支配人

さんを引張つて來たのぢや。

一同 怎うなど、して貰らへ、やつて貰へくく。

(トロ々に各自ガヤくと騒ぐを山形之れを見て。)

山形 オイお前方、何にをして居るのか、モウ退^ひけてから、一時間も成るに、まだ此處に居るの

か、ナゼ歸らない。

金太 モシく支配人さん、歸れますかいな、歸れますかいな。五十人の職工が、一週間夜^{よどほし} 仕

事をしたのも、一日に十二錢の手間代を、遺ると、仰有つたのを、楽しみに、皆働きましたのぢや、其れが、今日になつて、都合で拂へんなんて、殺生過ぎますがな、我々は一日十二錢でも大金で、夫れを、貰へると思へばこそ朝から働いて、疲れた體を、空腹抱へて、夜仕事したのやおまへんか、夫れが今日になつて、拂へんなんて、言はれて、あゝ左様かいなど言つて、皆歸れますかいなく。

山形 其の問題は先刻から、貴様に云つて居るぢやないか、一同の職工には、氣の毒だけれども、本會社も、先方の日限を間違つて、相手が、西洋人だけに、お前方が、夜間事業をして、製作をした木管は、全部駄目に成つたのぢや、會社は材料は損失だし、其の上、お前方の賃金を仕拂ふと言ふ事は、會社の經濟上、許せないのだ、爲めに、此の結果を見たのだ、根本の損害が、枝葉の職工等に、來るのは、免れない事ぢやないか、お前方も、其麼無理な事を云うて社長を虐めるものぢやない。

金太 御尤もで御座りますけれども、我々と、社長さんとは、身分が違ひますので。

辰三 オイく、金太、何を云つてるのだえ、何にが御尤もだえ、此方へ寄つてゐねえ。

(ト金太を引き退けて山形の前に進み出て。)

辰三 オイ支配人さん……山形の正公……

山形 何んだ、失敬な、正公なんてッ。

辰三 手前は山形の正吉と云ふ名前ぢやねえか。俺も、此の會社の雇人なら、支配人だつて雇だえ、正公と云つたのが怎うした、サア、金太に云つた、口上をモウ一度言つて見ろい。

山形 貴様は喧嘩を賣りに來たのか。

辰三 時節柄、割引してやるから、俺の拳骨を、買つて見ねえ。

四良吉 オイく辰、辰、其れは、お前無茶ぢや、此處へ寄つていゝな、喧嘩やないのやよつてなア。

(ト辰三を引退けて前に進みながら。)

エへへ、へ、へ。

(ト追従笑ひをしながら。)

支配人さん、辰は、あんな質だすさかいに、堪忍して遣つとくなはれ、詰り何んだす、今度の夜業の錢を頂けん事になりましたのかいなア。

山形 サア氣の毒だけれども、會社は、損害の上の損害、到底拂へない事になつて居るのだ。

四良吉 其れは、まあ御尤もで……。

十助 馬鹿野郎。何にを云つて居るんでえ、此方へよつてゐねえ、オイ支配人さん、何にかえ、怎うしても、拂へねえのかえ。

(ト屹度駄目を押す。)

松藏 オイ／＼爾う言うたら、又支配人さんかて、御立腹やがな、物は言ひ様うやがな、物の言

ひ様の下手な男や、ア、ヘエツ……詰りなんだすか、其のエ、何んだすなア……

山形 お前の言ふ事は更に要領を得ない。

松藏 一寸、誰ぞ變つてんか。

仲吉 ハア、支配人閣下。

(ト前に出て敬禮をして。)

自分は軍隊に、居つた者で有ります、工賃仕拂ひにならんと云ふのは、上官の命令で有りますか。

山形 爾うだ、社長からの命令だ。

仲吉 上官の命令、萬止むを得ません。

(ト失敬して元の處へ来る、梅吉は焦れ出して勢ひ能く。)

梅吉 オイ支配人、俺れは、丹波市の若え者で、少し計り煩い人間ぢや、大體。

(ト云ひかけると山形は煩き相にして上手へ行きかける、と金太はツカくと前へ出て山形の手を捕へ。)

金太 モシ、貴方、話も極めんと、何處へ行きなさる。

山形 貴様等を相手に、貴重な、時間が費せるか。

辰三 何にを云やがるんだい、此の蚊蜻蛉め。

(ト打たんとする時上手より本田秀吉ツカくといで來り辰三の振り上げる手を捕へて。)

本田 手前何んと云ふ、眞似をするんだえ。

(ト云ふ、山形は之れに勢を得て。)

山形 貴様我輩を打つ積りか、オ、打つて見よ、天下の法律を無視して、打つて見よ。(ト強くなる)

本田 山形さん、其麼事を仰有つて、此の手を、放せば、打ち兼やしませんよ。

山形 夫れでは其の手を放すな。

本田 大丈夫ですか、貴下も大人氣ないぢや有りませんか、多寡が、其の日暮しの職工相手に、

天下の法律も、御座いますまい、ヤイお前等又、何んと云ふ眞似をするのだい。

金太 夫れでも、職長、まだ今日も、夜業の勘定が、拂うて貰へんのぢやがな。

一同 オ、爾うだく。

(トロ々にワイくと云ふ。)

本田 マアくいとよく、山形さんが、拂はぬと、仰有るのぢやない、社長さんが、拂はぬと

仰有るのぢやらう、さすりや、仕方がないぢやないか、ねえ山形さん。

山形 宜しく足下の、御同情を仰ぐ。

辰三 あの口の利き様が、癩に觸るのだえ。

本田 手前だつて、餘り、宜い口の利き様ぢやねえや、山形さん、濟みませんでした、今皆の者を、引取らしますから、御安心なすつて、お歸り下さいまし。

山形 ヨシ、職長の権利を持つて、速に引取らすべし、世に無教育の奴程度し難い者はない。

金太 其れが、怎うしましたのや。

山形 何にかッ。

本田 山形さん、此奴が馬鹿に力が、強いんですよ。

山形 アゝ左様かイヤ失敬。

(ト早足に上手へ引返す。)

辰三 オイ本田、手前支配人に、あんな事云つたつて、今日は話が、つかなきや歸らねえぜ。
十助 俺等は、事に依つたら、怎うと、覺悟をして居るのだ。

梅吉 夜が明けたつて、話のつく迄、此處は、歸らねえ。

松藏 俺等も、其の積りで、懷爐入れて、晩飯の用意の、辨當まで、持つて來て居るのぢや。

四良吉 俺に、其の辨當半分お呉れや。

本田 皆も其の積りか。

一同 爾うだく。

本田 モシモ、夜通し、恚うして居て、呉れなかつたら、怎うする積りだ。

仲吉 辰の奴が、會社を潰すと云よつて、俺も手傳ふのぢや。

本田 皆も其の積りか。

一同 爾うだく。

本田 其れぢや、お前等は、社長に怨みが、なうて、喧嘩の相手は、此の會社の硝子窓や、柱に

怨みが有るのかへ、喧嘩の相手は此の會社の建物かえ、昨夜から俺が、あんなに止めても、遣りたけりや、やれサア此の煉瓦から、壊して見い。

(ト屹度なつて云ふ、之れにて皆々顔見合せる、金太はポカンとしたる科にて。)

金太 矢張り役者が、一枚上ぢやわい。

辰三 何にを、云やがるんでえ。

金太 何にを、云うて、お前本田の云ふ事と、俺の言ふ事と、同じ事ぢやがな、詰り、馬のお腹で、同腹やがな。

辰三 何にを言やがるんだえ、オイ本田、手前其の位る言ふのなら、此の話をつけて、一週間の、夜業の賃金、一人前八十四錢と云ふ物を、屹度取つて呉れるかえ、大丈夫かえ。

本田 其程、俺れが、便り無けりや、手前等勝手にしろい、昨夜五十人の、口を揃へて、俺に任すと、云つて呉れたぢやないか。

四良吉 其れ見い、職長が怒つて居るがな、俺は始めからストライキは、不可というて、居るのぢや、ナアの皆の連中。

一同 爾うぢや〜。

(ト口々に云ふ。)

辰三 オイく、其麼に、云ふと、俺れ一人が、暴れ者になるぢやねえか。

金太 お前一人ぢやがな、二つ言目には、會社を潰せくと云ふのは。

辰三 何に、云やがるんだえ、昨夜の寄合に、手前が、一番先きに、石油で一番の職場へ火を注けると吐したぢやねえか、酒を食らひやがつて。

金太 今爰で、其麼事言ひないなア、あれは、酒の上やがな。

本田 金太、手前だつて、宜くねえぞ、馬鹿力が有るだけに、直ぐ其麼事を、吐しやがるのだ。

金太 堪忍……。

十助 マア本田、我慢して、賃金貰つて呉んねえ、俺等は此の、八十四錢を宛にして、嬢の、襦袢を、買ったのだからねえ。

(ト皆を振り見て。)

オイ皆茫然ぼんやりせずと、職長に、頼みねえく。

一同 職長頼むよくく。

(ト口を揃へて云ふと本田の傍へ寄る。本田は一同の顔をジツト打眺めて溜息をつき。)

本田

ア、皆も、氣の毒だ——鬼でも、取ツ組む、荒男許りだが、貧乏には叶はねえなア、ヨシ俺れも職長とか、兄イとか、言はれて居るのだから、屹度社長に逢つて、貰つて、遣るか、今晚の十時迄待つて呉れ、此處の社長だつて、積川清と云へば、随分世間で、羽振りの利いた方なんだから、之れから俺れが、御目に掛つて、譯を話しや、萬更判らねえ人もなからう、だから、一ト先づ温順しく皆内へ歸つて呉れい、手前等が、此處に居て呉れると、何んだか、尻押をされて來た様で、俺れも、話が仕憎いからねえ、俺の、顔を立て、一ト先づ、歸つて居て呉れ。

辰三

ヨシ夫れぢや、萬事兄貴に頼んで、一ト先づ皆んな、引取らうよ、然し、お前が、話に行つて呉れて、社長の口から、怎うしても、拂はねえと言へば、お前は怎うする積りだ。

本田

爾うだなア、若しも話がつかないや。

(ト腕組をして深く考へ込む金太は突然に。)

金太

火を點けようか。

(ト叱り飛ばして睨み付けるが木の頭、金太は不首尾の科し、皆々本田の傍へ集りてヒソ／＼と密談をする此の模様にて宜しく靜に道具一轉する。)

二、本田秀吉宅の場

本舞臺、二重人形飾り、上下落間、上手に裏長屋の便所へ通る庭先を見せ、古びたる植木棚に縁日の安物の植木が二三素焼の鉢に植ゑて並べ有る。正面上手に新聞張交ぜの障子、其の上に古き神棚、其の上手に間中の押入、其上に古き箱を佛壇にして、中に古き大師の像に位牌、花立、蠟燭立、等有りて、明火を上げ有る。其の前に古き竹の臺に五分心洋燈に破れたる紙の笠を冠せて有る、正面は間中の落間になり表口の心、其の向に古新聞にて破れたる處を、切り張りしたる腰高の障子續いて下手に古き襦子窓の裏を見せる、之れに小障子をはめ有る下手に臺所口を見せ、置竈、蠅不入等を置き蠅入らずの上に櫃、膳、布巾、茶碗、箸箱、小鉢に漬物を入れ載せて有る其の横に古き米櫃、涼爐、團扇、土瓶、茶呑茶碗、炭箱等を置き涼爐には大土鍋を掛けて本物の飯を焚き居る事、平舞臺には一面坊主疊、角

火鉢、破れたる座蒲團二三枚上手に古き衝立に本田秀吉の着替の綿入、手拭、古きメリヤスのシヤツ等を掛け有る。總て秀吉宅裏長屋の體にて詔への囃子にて道具納る。
ト父爲吉は涼爐の土鍋より飯櫃に飯を移し居る、宜き處へ正面入口より娘義太夫おみね肩付き義太夫娘の拵にて淨瑠璃三味線を持ち編笠を冠り入口の外より顔を出し。

おみね 今ばんは。

爲吉 オ、おみねさん、今お歸りかえ。

おみね アイ今日は朝から、出たのぢや。

爲吉 これから又晩は、色町へ流ぢやなア。

おみね イ、エ、今晚は、長屋の衆の註文だ、内で義太夫の會ぢや、二錢宛の、持ち合ひぢや、聞きにおいでなされ。

爲吉 ア、折角子供等に、甘い漬物を、食はさうと思つて買つて置いたのに、災難ぢやがなアハハ、。

おみね 違ひなしぢや、おぢさん、お飯焚かいなア。

爲吉 今、ヤツト出來上つたのぢや。

おみね おたかはんは、まだかいなア。

爲吉 お高も兄も、まだぢや、此の頃は、チヨイ／＼會社に、夜業が、有るので今晚も亦爾うか

と、思うて居るのぢや。

おみね 兄さんも、お高さんも宜う働いてやな。

爲吉 サアお蔭で、兄妹仲宜う働いて、私しを大事に掛けて呉れるので、幸福者ぢやと思うて居るのぢや。

おみね をぢさん、飯焦げて居ると見えて、焦げ臭いで。

爲吉 アッしもた、涼爐から、下ろさずに、移して居るのぢやがなアハハ、、。

(ト此の時下手にて。)

金太 其麼馬鹿な事が、有るかえく。

本田 まあく、靜かにせいく。

(ト此聲にておみねは一寸下手を見て。)

おみね ア、兄さんが、歸つて來たぜ。

爲吉 何んぢや大きな聲を出して居るなア。

(ト此の内おみねは入口を見て。)

おみね 何時も来る金太さんと一緒ぢやで。

爲吉 金太が、酒を呑んで居るのかいなア。

(ト宜しく捨臺詞の内、下手より本田先きに金太以前の姿にて出で來り入口へ這入る。)

本田 お親父さん、今歸つた。

金太 お爺さん、今晚は。

(ト大きな聲で言ふ。)

爲吉 金さん、偉い勢ひぢやなア。

金太 一寸怒つてゐるのぢや。

おみね 又、酒呑んで居るなア。

金太 誰が酒呑んで居るかえ、素面ぢやえ。

おみね ハアン、不景氣やで、酒呑まんと、酔うて居るんやなア。

金太 何にを、吐しやがるんだい。

(ト手を振り上げる。)

おみね オ、怖はく。

(ト言ひく、三味線を抱へて表へ出で行く本田は此の内二重へ上り。)

本田 オイ金太、静にしてくれ、隣は、壁一重だよ。

金太 だつて、あんまり判らんやないか。

爲吉 金さん、何にを、怒つて居るのぢやいな。

金太 お爺さん聞いて。

本田 ヤイ金太、何にを言やがるんだい、年寄に、其麼事を聞かして、心配さして呉れるない、手前の様な目先きの見えねえ奴てものは、有るものぢやねえ、宜いから、俺に、任して置け、社長がお留守なんだから、仕方がねえぢやねえか。

金太 それが、留守使うて、けつかるのぢや。

本田 サア假令、爾うでも、俺が、モ一度、飯を喰つてから、行くのぢやねえか、手前今晚の十

時迄で、俺に任したのぢやねえか、まだ今八時前ぢやねえか、モウ二時間位ゐ我慢が出来ねえのか、我慢が出来なきや、怎うでも、勝手にしろ。

(とポンと云ひ捨てる金太は面を膨らして無言の儘手荒く入口を開けて又ピツシヤリと荒く閉めてツツト這入る、爲吉は呆れて後を見送り居る。)

爲吉 偉い勢ぢやなア、秀よ、怎うしたのぢやい。

本田 ナニ……心配な事でもねえのだ、相變らず、酒呑みやがつて會社へ金貸せくと吐すのだ、本統に、あんな奴つて有るものぢやねえ。

爲吉 ア、爾うか、金太さんも、好い人ぢやが、酒が病ぢやなア、私しや又何事かと思つて、喫驚した。

(ト此の内本田秀吉は事業服を脱ぎかける爲吉は衝立の着物を後より着せかける。)

本田 父さん宜いよ、打遣つて置いて下さい。

(ト捨白詞にて着物を着替へる爲吉は膳、飯櫃等を前に持ち來りて。)

爲吉 サア／＼腹が空つたであらう、今日は、お前の好きな、鮭の鹽焼が有るから、お父さんが、

久し振りで、飯炊いてなア、焦かしてなア……。

本田 父さんが、炊いたのかい。

爲吉 爾うぢや。

本田 お高は怎うしたんだい。

爲吉 まだ會社から、歸らんど。

本田 冗談云つちやいけねえ、彼奴は今日用があると云つて、十二時限りで、會社を休んで歸つたと、職場で聞いたよ、夫れにまだ歸らねえ、畜生、何處へ行つて居やがるのだ、又活動寫眞へでも、潜り込んで、ゐやがるのだなア、畜生、仕方の無い女だ。

爲吉 イヤ／＼秀よ、お高は十二時過ぎに、歸つて來てなア。

本田 夫れから、怎うしたんだ。

爲吉 エ、あの……風呂へ行くというてなア。

本田 十二時から、お湯へ行つて、まだ歸らねえのですかえ。

爲吉 夫れから歸つて、金比羅さんへ參ると、言うてなア。

本田 讚岐のですかえ。

爲吉 イ、ヤ、横町の。

本田 誰れとですえ。

爲吉 エ、……あの隣のかみさんと。

本田 隣りのかみさんと、隣の、かみさんは、昨日國へ歸つたよ。

爲吉 其の又お國の……。

本田 何にを云つてるんだよ父さん何にも俺に、氣兼して、其麼嘘を言つて呉れなくとも宜いぢやないか、一人より、無い女の子だから、父さんの、可愛いのも無理はねえが、餘んまり甘いと、爲にならねえ、女は十六と云や、一人前だモウ劍呑な年頃だ、半日も行方を知らさねえで、親に飯を炊すてえ、不孝者がありますかえ、歸つて來やがったら、只置かねえ。

爲吉 爾う怒つて遣りないなア、あれかて十六と云へば、遊び盛りの最中ぢや、之れが、毎度と云ふ譯ぢやなし、今日始めてやないか、お父さんが、歸つたら、叱るよつてになア、お前がガン／＼吐つてやりなや、氣の弱い處へ、蟲の氣が有るよつてになア、蟲でも出て見いな、又心配やがなア、堪忍してやり、エ、お前も飯喰べたら、十錢上げるよつて、活動へ行つておいで。

本田 お父さん、俺は三十二だよ。

爲吉 三十二でも、活動見られるがな。

本田 へイ／＼有難う御座います。

爲吉　　イ、エ怎う致しまして。

(ト此の時正面の入口よりお高は工女の姿、桃割の髪を結ひ、亂れ毛を出して手には料理屋の折を持ち懷中に十六形の鎖付き金時計サツク入を入れて窃つと不首尾に入口を開けて。)

お高　　只今……。

(ト叮嚀に両手をつく、爲吉はハツト思入する、本田はジロリとお高を眺めた儘、飯を喰つて居る、爲吉はお高を座敷へ上げて、手眞似で兄が怒つて居る、と知らず、お高はモジくする、爲吉は謝れと仕方をするお高は折を爲吉に渡して下手へ坐し叮嚀に手をついて。)

お高　　兄さん、遅くなつて、濟みません。

(ト本田はジロリと睨んだ儘無言で又飯を喰ふ。)

爲吉　　秀よ、謝つて居るのぢや、何んとか言うてやりなア。

本田 お早う御座います。

(ト無愛想に云ふ、お高は稍々涙組んで居る、爲吉はお高を下手へ寄せて火鉢を傍へ遣り
勞はつてやる事有つて。)

爲吉 モウ捨てゝ置きく、兄さんは、今日一寸御機嫌が悪いのぢや、サアく塞むかつたであ
らう、サアく暖れく、お前今迄何處へ行つて居たのぢやエ、

お高 ……。

(ト無言にて俯向き居る。)

爲吉 お前泣いて居るのか、夫れ見よ秀よ、泣いて居るぢやないかい、始めから、私しが云うて
居るのぢや、氣の弱い子ぢやと云うて居るのぢや、泣かいても宜いわえく、兄さんはな、
お父さんが、叱つてやるく、爾うして此折は何んぢや……エ、怎うしたのぢや。

お高 頂いたの……。

爲吉 オ、爾うか誰れにぢや、エ、お友達にかえオ、そうかく其れで兄さんに持つて歸つた
のか。

お高 ……。(首肯く)

爲吉

それ見いよ秀よ、お前は、ガン／＼云うても、矢張り遊びに行ても、お前に喰はしたいと、思うて自分が喰はずに、チャント、持つて歸つて居るぢやないかえ、此處が兄妹ぢや。

(ト云ひつゝ折を開けて見て。)

イヨーこれは／＼、御馳走ぢや、玉子の厚焼に蒲鉾ぢや恰度飯喰うて居る時ぢや、サア／＼機嫌直して、喰うてやつておくれ／＼。

(ト本田の傍へ下手から立ちながら出す。)

本田

大きに御馳走様だ。

(ト皮肉に云ひながら玉子を挟んでグツト折の儘引寄せ、ズツト、お高の傍へ行き。)

オイお高。

お高 ……。

本田 高つたら、高ッ。

(ト切張り言ふト隣りにて柳のキヤリの淨瑠璃の三味線を微に聞かす。)

手前、此の折は、誰れに貰らつて來たのだ。

爲吉 秀よ、誰れでも、宜いぢやないか、今日はお前餘ッ程怎うかして居るなア。

本田 イヤお父さん、不可ねえ、此の馳走と、折の卵を見なせえ、住の江の風月の御馳走だ、此方人の様な、貧乏人が、夢にも喰へる、御馳走ぢやねえ、慥に變んた、父さん、怎うか、暫らく、黙つて居て下さいよ。サアお高、誰れに貰らつた、云つてしまへ、言はなけりや、殴るぞ。

(ト爲吉と顔見合せて氣味合。)

サア、兄さんは叱りやしないから、サア誰れに貰つたのだ、サア言ひねえ言ひねえ。

(ト色々と尋ねられてお高は口の内にて。)

お高 社長様に……。

(ト微に答へる。)

本田 ナニ、社長さんだ……会社のかえ。

(トお高首肯く。)

会社の社長さんに、何處で貰つた。

お高 住の江公園の風月樓で……。

本田 お前風月なんて處へ、誰れと行つたのだ。

(ト強く尋ねる。爲吉はハラ／＼しながら。)

爲吉 モット、優しう聞いてやりいなア。

本田 父さん黙つて、居なさい。

(ト又顔見合して氣味合。)

サア、有りの儘を、言つて呉れい。

お高 今日ねえ、社長さんが、仕事場へ見えてねえ……。一寸用が有ると仰在るから……。仕事を止してお供をして行たら……。裏門に自動車がつたの……。

爲吉 あのポー／＼と云うて走る車ぢやなア。

本田 黙つて居なせえ、其れから怎うした。

お高 これへ乗れと仰有るから、乗つたの……。

本田 手前、怎んな考へで、其れへ乗つたのだ。

お高 何にも、考へ無いで乗つたの。

本田 フム……。其れから怎うした。

お高 すると、住の江の、風月と云ふ内へ行つたの……。其處で御馳走になつたの。

本田 お前と社長と二人切りかえ。

お高 エ、社長さんがねえ、お前が仕事を、能くして呉れるから、御褒美に御馳走をするつてねえ。

爲吉 ア、成る程。

本田 成程つて判つて居るのですかえ。

爲吉 判つて居いでかえ、此の子が、勉強するものぢやで、社長さんは、御目が高いわえ、其れで、御褒美に連れて行きなかつたのぢや。

本田 父さん、お前さんは、何處まで、人が良いのだ、多寡が、女工の褒美に、誰れが風月あたりへ連れて行くものか、能く胸に手をおいて、考へて見て下せえ。

(ト爲吉は胸に手をあてゝ、ヂツト考へる。)

本田 サアお高、云つて仕舞へ、其の外に何か仰在つたゞろ。サア御馳走の外に何か、貰つたらう。何に、貰はねえ、筈棒め貰はねえ譯はねえ。

(トお高の懐中を見て。)

手前の、懐中の、脹らんで居るのはなんだ。

(ト云はれてお高は隠す。)

何にを、隠すのだえ。之れは何んだ。

(ト無理にお高の懐中へ手を入れて十六形サツク入の時計を取り出して驚きながら。)

父さん、之れを見させえ。

爲吉
其れは何んぢや。

本田
時計だよ。

(トサツクを開けて爲吉に見せる爲吉は時計丈けを取り上げて。)

爲吉
イヨー見事なものぢやなア。

(ト見るサツクの中に時計屋の保険證の有るを本田は心付き夫れを取り出して見る。)

本田
十六形丸金女持懐中時計代價五十二圓也。

(ト讀む爲吉も不審らしく。)

爲吉 秀よ、恁麼物を、下さる様では、こりや、只事ぢやないで。

本田 父さん、分つたらう。

爲吉 判つた、こりや社長さんが、お高に惚れて御座るのぢや、エ、兄よ、結構ぢやないかえ。

本田 父さん結構かえ。

爲吉 結構ぢやないかえ、其の日暮しの、我々の様なものの娘が、會社の社長さんに、惚れて頂くとは、結構ぢやないかえ。

本田 それぢや、此奴を十六まで、育てたのは、金持の玩弄にする積りで、育てたのかえ。

爲吉 エツ。

本田 俺れや情けねえや、貧乏すると、其麼氣になるかえ、父さん昔の内の身分でも、矢張り其麼に云つて喜ぶかえ、我々兄妹は、昔しはお乳母育ちだと、能く寢物語に言つたぢやないかえ、其の時分に、五十圓の時計で娘を玩弄にされても結構だと喜ぶかえ、其麼に嬉しけりや、お高の奴を、女郎に賣つて仕舞ひねえ。サアお高……。

(トお高に改まつて。)

此の時計を、貰つて後は怎うしたのだ、オイ手前お母アが、死ぬ時に云つた事を忘れたのかえ、覺えて居るか、怎麼事が、有つても、お高丈けは、詰らねえ亭主でも、亭主を持たして呉れいと云つたぢやねえか、風呂敷包でも、嫁入をさして呉れよと、俺りや、お母アに頼まれて居るのだえ、手前は忘れたのかえ。父さんは、お年の加減で忘れたか、知らねえが、手前はまだ、物忘れをする年ぢや有るまい、ナゼ此の時計を、社長の前へ叩き付けて、逃げて歸へつて來ねえのだ、怎麼ものを、ブラ／＼胸へ下げてえのか、コラお高見ろ：：兄さんはねえ、三年越し、破れた布子を、着て居るが、貴様にや、今年の正月も、擬物でも大島の書生羽織を着せたぢやないか、十二時から今頃迄、手前風月で、何にをして居たのだ。

(ト感極まつてポイントお高を蹴るを木の頭、お高はワツト泣く、爲吉は途方に暮れて俯向く、本田は涙と共に飯を喰ふ。隣家にて淨瑠璃柳の段切りを聞かす此の模様各自氣味合にて道具一轉する。)

三、積川清宅事務室の場

本舞臺、正面一間本硝子戸の入口、續いて少々斜に上手に硝子窓、これにオリブ色のカーテンを掛ける、入口上手に通りの大硝子障子を四枚、向う往來を見せる事、其の前に大なる簿記臺、用紙、インキ壺、ペン筆等を置き、卓上電話器を置く事、下手正面に世界地圖の大軸を掛け其の下手に大なる金庫を置き、上に洋式の大なる帳簿を五六冊積み有る、平舞臺は一面絨氈を敷き中央に高尚なるテーブル、灰皿、呼鈴、蓑箱等を置き、皮張の安樂椅子竝に客椅子五脚を置き總て積川家事務室の模様、詠への囃子にて道具納る。
ト同時に金太は手に酒の入りたる四合瓶を提げて酒に酔つたる心にて正面入口を開けていで來り。

金太

御免なされやぐ。

(ト言ひながらヒヨロ／＼としながら、下手の椅子に腰をかけて、呼鈴を叩くと同時に奥より女中お光は。)

お光

ハアイ――。

(ト答へてハイカラの下女の拵へにて白のエプロンをかけていで來り。)

お呼びになりましたのは。

金太 私いだすね。

お光 オヤ厭やだよ此人は、お前何處から來たの。

金太 今表から來ましたのや。

お光 ナゼ聲を掛けないんだよ、お客さんかと思つたよ。

金太 お客様ぢやがな。

お光 お前さん、何處の人だよ。

金太 俺は、此處の會社の職工で、山田金太郎と云ふ者で、へい旦那に御目に掛りたいので一寸呼んで貰らへまへんか、御禮に一杯怎だす。

(ト酒の壺を前へ突き出す。)

お光 厭やだよ此人は、職工なんて、恁麼處へ來るものぢやないよ、旦那の御目に止まつたら、叱かられるから、早く御歸りよ、お上に知れては大變よ。

金太 お互に、知れぬが花よ世間の人に、知れちや、互の身の詰りヨイく。

(ト歌を唄ふ。)

お光　チヨイト、お前さん冗談ぢやないよ。

(ト此の聲に山形以前の拵にて上手より出で來り。)

山形　誰れだく、其麼處で大聲を出すのは。

金太　今晚は……。

山形　オヤ金太ぢやないか、馬鹿ツ、何んと云ふ醜態ひさまぢや。何に用有つて事務室へ來るのか、何んと云ふ蠻聲をだすのだ。

金太　私は、少し御用が有つて、參つたもので、決して失禮をしに來たのやおまへん、失禮をしたら、此奴がさしますので、

(ト四合壘を一寸見せて。)

不足が有れば、此の四合壘に仰有い、女中さん、一寸社長さんと呼んでおくんなはれ。

山形 イヤ／＼呼ばんでも宜い／＼。

金太 呼んでおくなはれ／＼。

山形 煩い奴ぢや。ヨシ／＼夫れでは呼んで来い……なア……。

(ト山形は女中に奥へ去れと目で知らすお光は呑み込み。)

お光 ハイ／＼畏りました……。

金太 酔うてもチャンと判つてますぜ、目で物を云うて、可笑しい事をしなはんな、呼んで貰へねば、奥へ行きますぜ。

お光 ハイ／＼呼んで参ります／＼。

(ト思入有つて上手へはいる。)

山形 オイ金太、貴様恁麼装りで、恁麼處へ來ては、爲になるまいぞ、俺が内々にして遣るから、早く歸れ／＼。

金太 お前さんでは、判りまへん、社長はんを、呼んどくなはれ／＼。

(ト大聲にて云ひ出す山形は困じて。)

山形 ヨシくぢや用件を俺が聞かう。

金太 お前さんでは判らん、社長さんに逢ひますのや。

(ト又立上つて行きかける山形は金太を捕へて突出さんとする兩人捨白詞にて高聲を出し争ひ居る處へ社長積川清立派なる俣にて出來りて。)

積川 社長は私ぢやが、何か用か。

(ト云ふ之れにて金太はハツト驚く科有つて前を合して叮嚀に御辭儀をする。)

金太 ヘイ今晚は。

積川 貴様は見た様な男だなア。

金太 ヘイ第二の工場に居りますもので、山田金太郎當年三十五歳、産れは……。

積川 オイく其麼事は、聞いて居らん、何用が有つて來たのだ。

金太 ヘイ昨日から、此の支配人の正やんに、頼のんでます、一週間の夜業の賃錢の、八十四錢

なア、旦那はん……一杯怎うだす。

(ト舌の廻らぬ口調にて壘を出す。)

積川 オイく、大變な上機嫌ぢやな、お前酒を呑む位の錢が有れば、何にも拂へ無い賃金を、

無理から脅迫がましい事を云うて、此處まで來ないでも、宜いぢやないか。

金太 酒呑む錢が、おますかいなア。

山形 貴様呑んで居るのぢやないか。

金太 見とくなはれ、此の姿だす、半纏を曲げて、燒糞で呑んでますのや。

積川 ナゼ爾う焼けになるのぢや。

金太 何んで焼けになる、申し旦那、焼に貴下がしなはるのぢやがな、此の間内の夜業も、一日十二錢宛貫へると思うて、遣つて居ましたのや、其れに呉れんとは何事や、僅な錢貰うて、働いて居ます、蟲けらみたいなものだす、其の蟲けらの、上前を、はねて五十人の者が……。

(ト、シクく泣き出す。)

積川 此奴泣上戸だ、オイ山形警官を呼んで、引張り出せ。

金太 コラツ、俺が、何にを悪い事をしたのぢや、サア突出すなら、突出せ、抱いて行てやるぞ
く。

(ト仰向きに寝る、山形は金太郎の手を取つて無理に引き起して、突出さんと争ふ、宜しく捨白詞にてヤイヤイと云ふ。此の時本田秀吉は正面の入口より出で来る、上手奥よりは此の聲を聞き付け夫人菊子出で来る。本田は金太郎の傍へツカくと來りて。)

本田 ヤイ金太、手前又……何んと云ふ有様だ。

金太 オ、本田、……俺は……恁麼口惜しい事は無い。

(ト泣き出す。)

積川 オ、本田か、此奴は、實に困る奴だ、更に要領を得ないのだ。

金太 要領は、判つて居るわい、錢呉れたら宜いのぢやえ。

本田 何にを言ふのだえ、金太手前は、俺の顔を潰すのか、十時迄待てと云つたのを忘れたのか。

金太 モウ十時過ぎてるわい。

本田 馬鹿な事を言ふな、まだ九時半だぞ。

金太 汽車でも、少々は、延着するわい。

本田 延着ぢやない、早く來すぎて居るのだい。

金太 そんなら、出直すわい、オイ／＼兄貴頼むぜ、十時打つたら、ザツトかけて、ぼうと、燃やうして、皆んなが寄つてバリ／＼やで。

本田 馬鹿な事を言ふな。

積川 何の事だ今のは。

金太 ヘエ、ン、ザツトかけて、バアツト、燃えてぢやい。

本田 馬鹿な事云ふな、サア早く歸れ／＼。

(ト宜しく宥める、金太は三尺帯の間に挟みし錢を六錢落したるを探す科有る、本田は捨白詞にて共に探してやる、ト、錢を拾ひて渡す。)

金太 兄貴頼むぜ……。

本田 宜いよく。

金太 本まに……オイ俺の下駄怎うしたい。

山形 貴様跣で來たのぢやないか。

金太 何にを、誰れが……。

(ト突き掛からんとするを、本田は止めて正面の入口の外へ連れて行きて金太を歸らす、本田は積川の前に來りて叮嚀に頭を下げて。)

本田 旦那、誠に相済みません、御挨拶も後になりました、今晚は。

積川 マア其れへ掛け。實に今の奴は、怪しからん奴だなア。

菊子 私も何事だらうと思つて參りましたよ。

本田 オヤ奥様でゐらつしやいますか、先日は有難う御座います。

菊子 何に……博愛主義労働者慰問として、一同へ、おかちんを上げたのだから、御禮は恐縮
ねえ……。

(ト卷苘をくゆらす。)

積川 本田、聞けば過日來の夜業の賃金の問題で、何んだか、ゴタ／＼して居るさうだねえ。

本田 ヘイ……二三日前から、ゴタ／＼して、困つて居りますので。

積川 お前も今晚は、其の話で來たのか。

本田 イエ、爾うぢや御座いません、元々あの仕事は、旦那の方も、御損ださうで、其の上、職

工に賃金を拂ふなんてえ事は、出來やしません、其の理窟が、判らないのですからねえ。

積川 中々……（菊子の顔を見て）之れは、物の眞理を、解して居る、要するに頭が宜いんだねえ。

菊子 全くですね、身は労働者にして、明晰なる頭腦を備ふ、以て他山の石とすべしですねえ、チヨイト五色の酒如何。

本田 イ、エ五色の息を吹いて居る身分で、五色の酒處ぢや御座いません。

山形 其れぢや、君、何か外の問題で來たのか。

本田 ハイ一寸お願いが御座いまして。

山形 何んの用だ。

本田 ヘイ少し、内々ですから、一寸暫らく。

山形 ア、爾うか、御主人一寸暫らく此の場を。

本田 イ、エ、貴下が、暫らく一寸此の場を。

山形 ア、我等の方か。

本田 ヘエー……左様で。

山形 飛んだ間違ひだ。

本田 頭が宜いんですねえ。

山形 之れはイヤハヤ、恐縮、御主人御免。

(と一禮をして上季へはいる。)

積川 人を遠ざけて、何か秘密の用件か。

本田 一寸變な物が……妙な處から、手に入りましたので、買つて頂きたいと存じまして。

積川 お前が、我等に賣物とは、可笑しいねえ。

本田 ヘイ旦那様より、奥様向きかと存じますので、……ヘイこれで御座います。

(ト以前の時計を懷中より出して卓上に置く、積川は之れを見て驚く、本田は積川をキツト睨み付けて。)

旦那馬鹿に、お寒い晩ですねえ。

積川 イヤに、冷えるねえ。

(ト氣味合、菊子は何の氣も付かずに其の時計を取り上げて。)

菊子 オヤ、ウオツチなの、一寸貴方、御覧なさいねえ、流行の形よ、アラ十六形だわ、オヤ九

金だよ、ねえ貴方、私が貴方に、此の間買つて下さいと、御願ひしたのは之れですよ、一寸買つて遣つて下さいねえ。

積川 ……ウム……買つても宜いだらう。

(ト苦しき思入れ。)

菊子 併し一寸、お前恁麼物を、怎うして、手に入れたの。

本田 其れが奥さん可笑しいのですよ、實は私の妹が貰つて來ましたので、旦那、貴下も序にお聞きなすつて下さい。

(ト力を入れて言うて。)

かお

世間にや随分、助平な馬鹿野郎が有るぢや有りませんか、然も立派な身分の旦那でねえ、藝者狂ひも妾狂ひも出来る身をもつて、私の妹に、白羽の矢を立て、ねえ、其れも、お前さん、惚れたの好いたのといふ、色とか戀とか云ふのぢや有りませんので……只だ十六

の娘盛り、假令面は不味くとも、其生娘と云ふ丈けに、一寸自由にして遣らうと、其の金時計を、餌にして、荅の花を踏躪らうと、何んの事はねえ、狝々でさあねえ。

菊子

要するに、情慾の奴隸たねえ、相當の階級の紳士として、少女の貞操を、蹂躪しようとは、一種の惡魔だね、爾う云ふ奴は、社會制裁上、大いに、懲戒してやる價值が有りますわねえ貴方……。

積川

全く紳士の風上にも置けないねえ。

本田

其れが平氣で、大きな面をして、馬車で大道を歩いて居るのですからねえ。

菊子

オヤ可也、身分の有る人ねえ、何處の何んと言ふ人なの。

本田

へエ……名前も面も、知つて居るのですが、其れ迄言つちや、氣の毒ですから、其れは申し上げますまい。

(ト之れにて、冷やく思ひ居りし積川は、ホツト安心の科し。)

菊子

全く美德だねえ、人の名譽を重じて、名を發表しないのは、感歎、濟美の極ですわねえ貴方……。

積川

之れは、頭が宜いからねえ。

本田

頭は宜いか、悪いか知りませんが、人間並に血が御座いますから、當り前なら、此の時計

を持つて、其の助平野郎の、面へ投げ付けて、貧乏しても、俺れ處の娘はまだ、淫賣は、さゝねえと、面を逆さに引ん剥いて遣りますがね。

菊子 痛快だねえ。

本田 其處は、貧乏人の悲さに、其麼意氣地は御座いませんや、其れより奥様に御願ひ申して、此の時計を買つて頂いて、昨日から八釜敷く、血を見る様に騒いで居る、職場の連中に、其の金を分けて遣りまさあ、怎うせ、御損の上の賃金は旦那はお出しになる事は出来ません、すまいから、此の時計さへ、無いものにすりや三方四方、甘く納りますから、ねえ旦那、成丈け、宜い値に買つて下さいませ。

積川 アゝ有難い……買つて置いて上げ。

(ト菊子に云ふ。)

菊子 恰度私も、欲しいのだからねえ、お前幾許に賣るの……。

本田 ヘエ其麼ものゝ相場は、私より旦那の方が、能く御存じですからねえ。

菊子 ねえ、貴方、成丈け高く買つて上げませうよねえ。

積川 五六十圓に買つて上げなよ。

菊子 爾うだね、五十圓なら宜いだらう。

本田　へエ……八十四錢が五十人、其れ丈け有れば結構です。

菊子　サウ。暫らくお待ちよ。

（ト腰の鍵を持つて正面の金庫より金を取り出しに行く。）

積川　然し其の金を、全部職工に、分配して仕舞つては、お前の取る金が、無いぢやないか。

本田　何に……宜う御座います。怎うせ穢れた金ですもの、妹一人が玩弄にされて、五十人からの人間が甘い酒の一杯も、笑つて呑んで呉れますりや、好しや操は、破れても、貧乏人の小娘には、過ぎた手柄で御座います……。

積川　君は何んと云ふ、美しい人間ぢや、ア、其の悪魔が、聞いたれば、殆ど熱鐵を呑む思ひがするだらう、將來悔悟して、君の厚意に報ゆるだらう、謹んで爰に感謝の意を表す。

（ト本田の手を取りて無言の儘謝罪をする、此の途端菊子は表を向く。）

菊子　オヤ丸で、貴方が、謝つて居るやうねえ。

積川　フム……餘り本田に同情してねえ……。

菊子　それ五十圓……。

(ト本田に渡すと同時に裏にて無数の人聲、足音騒しく聞ゆ、積川、本田、菊子は何れも其の方角を見てハツト驚く、本田は時計を見て。)

本田　　オヤ十時だ……。

(ト立上ると同時に正面の扉を蹴り開けて、金太は好みの兇器を持つて入り来る、本田は之れを見て驚く、矢庭に金太の傍へ走り。)

それ金太……金だ……。

(ト紙幣を握らして勢ひよく正面の入口より外へ飛出す、金太は渡されし金を見て拍子抜けしたる科し、菊子は人聲に驚いて上手へ逃げてはいる、積川は立上つて、沈黙の體、金太は紙幣を數へながらウロ／＼して居る、裏手には大勢の人聲にてヤレ／＼と呼ぶ、本田は待て／＼話が附いた／＼金は金太に渡したと叫ぶ、此の聲を聞き金太は尚狼狽する科、積川は腕組をした儘無限の思入れ宜き處へ本田は片袖を割かれ着物は所々に破れを生じ、顔腕等に微り傷を負ひて、稍々裏手の聲の靜りたる時、ツカ／＼といで來りて卓の下手にホツト息

をつき。)

本田　　モウ大丈夫です……。

(ト金太を見て。)

何にを、して居るのだい。

(ト云ふ此の聲に金太は喫驚してペツタリと坐す、暫らく氣の抜けたる如く茫然として居り、手に有る紙幣を見て一枚宛數へ始める、積川と本田は互に顔見合して氣味合、菊子は時計を片手に窃つと上手より顔を出す、同時に以前の職工全部下手硝子窓より顔を出す、本田を見て各自口々に禮を云ふ、此の模様宜しく各自氣味合木なしにて靜に。)

——滿　來——

底本 日本戲曲全集 第39卷 現代篇第7輯

出版者 春陽堂

出版年月日 昭和4